

保育現場と養成課程の接続

— 「幼稚園ってどんなところ？」（石川県）への学生参加から —

Facilitating the Connection between Early Childhood Programs and Teacher Training Curriculum

— Student's Participation in “What's the YOCHIEN” (Ishikawa Prefecture) —

大井佳子^{*1}、鮎川 正^{*2}

要旨

未就園児親子を対象とする一日幼稚園イベント「幼稚園ってどんなところ？」（石川県私立幼稚園協会）には地域の養成校学生がボランティアとして参加する。関係者による多種の評価が分析され、学生と現場保育者の双方にもたらす学生参加の効果が認められた。特に、学生と現場保育者とが遊び創りを協働する中で生まれるメンバー間の対等な協議が注目され、実習とは異なる保育者と学生の関係性が質の高い保育者育成につながる養成課程から保育現場への接続を拓く可能性を示唆した。

キーワード： 保育者育成(Training Kindergarten Teachers)／協働(Coproduction)／
「幼どこ」(“What's the YOCHIEN”)

1. はじめに

認定こども園がスタートし、幼稚園は自園の在り方のこれからを見据えるよう迫られている。その現場に保育者を送り出す養成校もまた、地域の保育ニーズをどのようにとらえ、どのような保育者をどのような方法で養成するのかを問われている。養成校と保育現場とは密接な関係にあり、とりわけ地方では県内幼稚園と県内養成校との関係は深い。実習、求人、就職、大学から現場への研究協力依頼、現場から大学への講師依頼等、協力関係は多岐に亘る。しかし、近年は保育者の人手不足人材不足が発生しており、養成校教員との個人的つながりで、あるいは広く募集して自園に合った学生を選ぶといった従来型の方法では人材を安定的に確保することが難しくなっている。養成課程から保育現場への接続の問題は養成

校と保育現場の双方に突き付けられる今日的課題であると言えよう。

保育現場と養成校が出会う接点に実習がある。実習要項や実習懇談会によって養成校の考える実習像、言い換えると保育者像が保育現場に提示される。要項や懇談会のように養成校が自覚的意図的に伝えるものだけでなく、学生が書く実習記録や指導計画の様式あるいは保育現場に依頼される実習評価の項目によっても、養成校の描く実習像、保育者像が実習園に示されている。実習は、保育現場と養成校の描く保育者像が持ち寄られ、保育者としての育ちのイメージが重ね合わせられる接点なのである。しかし、実際の実習では、現場の保育者は自身が実習生であったときの実習を規準として再現していることが珍しくない。養成校の描く実習との照合もなかなか進まない¹。実習では保育現場と養成校がこれからの地域の保育を担う保育者像を照合することが難しいのならば、養成課程と保育現場を接続させる新たな仕掛が求められるところである。

本研究では、石川県私立幼稚園協会（「協会」

^{*1} OOI, Yoshiko

北陸学院大学 人間総合学部 幼児児童教育学科
保育原理、保育課程論、保育内容総論

^{*2} AYUKAWA, Tadashi

木の花幼稚園

と略記する)が開催する子育て支援イベント「幼稚園ってどんなところ？」への養成校学生ボランティア参加に注目し、その効果を検証し、これからの保育現場と養成校との協働の在り方を検討する。「幼稚園ってどんなところ？」通称「幼どこ」は未就園児親子を対象に開催される一日幼稚園事業で2011年より県内養成校最終年度学生がボランティア参加している。幼稚園就職希望者拡大につながる学生の幼稚園教育理解をねらいとして、当日だけでなく準備からの参加である。なお、本稿においても「幼どこ」と記す。

2. 幼稚園現場にとっての「幼どこ」学生参加

2-1 「幼どこ」の概略

1992年に第1回が開催された「幼どこ」は、2007年より8月の2日間、金沢市民芸術村全館を会場にして開催されている²。保護者が個々の幼稚園イメージを超える「石川の私立幼稚園」を体感する場として用意され、遊びが学びであるという幼稚園教育の理念を保護者に「見える化」する仕掛として企画されている。そのねらいから、保護者が幼稚園見学で目を留めやすい「お集まり」や一斉活動ではなく、幼児期にふさわしい自由感あふれる遊びを提供する。

会場の金沢市民芸術村は、1923年～1927年建設の紡績工場倉庫群のレンガ造りの概観と木組みの内観を生かした施設で、倉庫群を中心に、マルチ工房・ドラマ工房・ミュージック工房・アート工房・パフォーミングスクエア・里山の家³の6つの建物があり、屋外環境として広大な芝生広場、高木が散在する区域、地下水を利用した流れる水場がある³。「幼どこ」ではこの空間環境を活かして、劇や人形劇(ドラマ工房)、手作り楽器遊びや本物の楽器の演奏会(ミュージック工房)、大胆な壁面床面お絵描きや工作(アート工房)、小麦粉粘土や片栗粉粘土、ポンポンプールや新聞紙プールといった感触系遊び(パフォーミングスクエア)、アスレチック遊びやミニミニ運動会(樹木広場・芝生広場)などの遊びが提供され、加えて、里山の家での相談活動、マルチ工房での各園紹介壁新聞掲示、オープンスペース(ドラマ工房とミュージック工房をつなぐ半野外劇場)でのお楽しみ企画(園長先生たちのマジックショー等)

がある。来場者は「幼どこ」が用意する遊びだけでなく水場やオープンスペース、樹木と芝生の広場といった会場の環境を使って自由に遊ぶことができ、水着や着替え持参の参加者も少なくない。各幼稚園で実際に行っている遊びを超えて、さらには各幼稚園ではなかなかできにくい遊びも含め、「幼稚園教育が思い描く遊び」の提示となっている。

2-2 「幼どこ」への学生参加の経緯

石川県私立幼稚園協会が2011年に「幼どこ」への学生参加を県内の6つの養成校(大学3校・短大1校・専門学校2校)に要請するようになった背景の一つは「幼どこ」当日のスタッフ確保の難しさであった。多くの幼稚園が夏休みも自由登園や預かり保育を実施し、免許更新講座など義務づけられる研修も増大し、夏休みである8月であっても各園からのスタッフの供出が容易ではなくなっていた。また一つには養成校学生の保育所志向傾向に対する懸念があった。学生の関心を幼稚園に向ける仕掛が必要という認識が幼稚園協会内に生じていた。実習は学生個人と一幼稚園との出会いである。実習園への就職希望を抱いても、地方では小規模の私立幼稚園が多く毎年職員募集する園はほとんどない。個々の幼稚園ではなく学生が地域の幼稚園全般に向けて関心を高めることが必要で、そのために既存の「幼どこ」を活用できないかと考えられたのであった⁴。幼稚園教育、幼稚園教師と学生が出会う仕掛であるから、当日だけの見学やお手伝いではなく、スタッフの一員として準備段階から参加するように設定された。

参加要請時に想定されていた学生の体験内容は次のようなことであった。

- * 特定の園ではなく、多様な幼稚園の先生たちと出会う。
- * 2歳児向けの遊びという幼稚園にとってはこれからのテーマでの遊び場作りを通して、スタッフの一員としてスタッフ間の協働を体験する。
- * 学生が主体的に取り組み、自らの創造性を発揮する場となる。(具体的内容は後述)
- * 他養成校学生と出会う。
- * 当日、未就園児(および在園きょうだい)との

関わりを体験する。

* 当日、保護者との関わりを体験する。

ここに挙げられた「2歳児」「スタッフ間の協働」「保育者の創造性」「保護者対応」「赤ちゃんから小学生までの異年齢児の遊び」は、いずれも「これからの幼稚園教諭」に求められることでありながら、実習では体験しにくいことがらである。幼稚園教諭が直面する今日的課題に学生が触れ、体感するというプログラムであるため、実習を終えた卒業年度学生のみ呼びかけ対象を限定した。人手としてのボランティア募集ではなく、具体的な学びを想定した保育者育成プログラムとしての募集であった。

2-3 学生参加の実際

毎年春に学生ボランティア募集の文書が養成校に届き、各校では実習指導等の関連科目の授業で学生に参加が呼び掛けられる。養成校は参加希望者の名簿を作成し、リーダー・サブリーダーの連絡先を添えて協会に提出する。以降、協会理事会が選任した実行委員会の学生担当者が学生と連絡をとり、養成校の関与はなくなる。

「幼どこ」の準備の流れを記す。幼稚園スタッフは各幼稚園から1名が派遣される幼稚園教諭で、グループに分かれてブースの遊びを担当する。

実行委員会（4月中旬）→幼稚園スタッフ全体会（5月上旬）→各グループ活動→拡大実行委員会（6月）→各グループ活動→最終拡大実行委員会（8月上旬）→準備&スタッフ全体会（前日）→当日（8月下旬）→各グループ反省会（9月上旬）→実行委員会（9月下旬）

下線が学生の参加するものである。詳しく見ていく。

* 拡大実行委員会（6月）：各養成校の学生リーダー・サブリーダー、幼稚園スタッフの実行委員と各グループリーダー・サブリーダーが集まる。学生に向け、前年度の映像を用いて「幼どこ」の概略が説明され、グループリーダーより既に始動している各グループの遊び創りの現状

と各養成校の参加グループ割り当てが伝えられる⁵。グループに分かれ、学生リーダー・サブリーダーは幼稚園スタッフから担当する遊びのイメージ並びにスタッフとしての動きのイメージを得る。

* グループでの準備活動（学生は準備に参加しない場合もある）における学生の参加例：布を提供するA校学生で大きな布を芝生広場・樹木広場で用いる遊びプランを考える（身体表現グループ）。幼稚園スタッフが設定した劇に学生がオリジナルな役を考え幼稚園スタッフと合同で劇づくりする（ドラマグループ）。学生でオリジナルの手作り楽器を作り演奏する（ミュージックグループ）等。

* ブースの遊びの宣伝パフォーマンス：「学生が主体的に取り組み、自らの創造性を発揮する場」として学生に委託される。担当ブースの遊びのイメージを自分たちでパフォーマンスに構成しオープンスペースで実演する。ブースの遊びを紹介し、ブースへと誘うパフォーマンスで各グループ1日に2回、2日間で4回の実演となる。歌や演奏、寸劇やラインダンス、手品など各養成校ごとに趣向が凝らされる。「幼どこ」当日の1週間前に会場で拡大実行委員会がもたれ、学生スタッフは全員が参加してリハーサルを行う。他養成校のパフォーマンスに触れ、幼稚園スタッフからの意見を得て、当日までの1週間で自分たちのパフォーマンスの見直しと練り直しが行われる。

* 前日準備と当日：前日準備には幼稚園スタッフ全員と学生スタッフ全員が参加し、会場の設営等を行う。設営終了後、全員で全会場を巡回し各会場でグループリーダーから遊びの内容が説明される。当日も自身が担当する遊び以外のブースをスタッフが見て回れるように時間が設定されている。

以上のように、学生ボランティアを通して「自分たちに任される」「普段とは異なる人たちと一緒に取り組む」「他者を見る」の三つのスタイルで学びが用意されている。

2-4 学生参加に対する評価

毎年イベント参加者に記入依頼されてきたアンケート、感想文に加えて本研究のために実施されたアンケートを資料に、各層からの評価を見る。

① 初年度(2011年)イベント参加園長からの評価

当日参加した園長22名が「イベント評価書」に記したのから主なものを示す。

- * 学生自身の勉強と幼稚園の先生にとっても良い刺激があり、これまで以上に活気があってよかった。
- * 男子学生の方が体全体で遊び、好感が持てました。
- * 学生には良い体験の場であった。
- * 若々しく元気なよい。
- * 活動への積極的な参加、大変良かった。
- * 学生の参加でイベント自体がとても盛り上がっていたように思う。それぞれの学生が意欲的に関わってくれて感心した。
- * とてもよかった。学生にとっても幼稚園理解につながったのではないかな？

幼稚園長には、学生にとって、現場教師にとって、イベントにとって学生参加が有効と見えている。また、養成校学生に対する信頼が高まっていることが伺われる。

② 幼稚園スタッフからの評価 (2011年～2014年)

4年間分の幼稚園スタッフの「イベント感想反省」192名分を見ると、学生に言及したものは30名であった。主なものを抜粋する。

- * 今年、学生ボランティアの皆さんのお手伝いがとても大きな力になったと思いました。中略・・・、初回の会合からスタッフ園の先生方と学生の皆さんで意見を出し合い、多くの未就園児さんと親子の皆さんが楽しくアートのお部屋で安心して遊んでいただけるようにと、いろいろ考え工夫し(後略)(アート 2011年)
- * とてもいい経験になりました。来年は、現場で働きたいと強く思いました等、前向きな意見が学生さんから沢山聞かれました。学生さんはやはりパワフルで前向きな姿勢が良かったです

(ミュージック 2011年)

- * 学生さんからパワーと刺激をもらうことができました。学生さんにとって、このような現場のスタッフと身近に関われる機会も良い経験になると思う。劇では自分をさらけ出してやらないといけないので、「自分を出す」という良い経験ができたのではないかな。(ドラマ 2014年)
- * 学生さんもいろいろな準備に積極的に取り組んでくれた。先生方も何かあったらすぐにアドバイスをしていたので、どんどんいいものになっていったのだと思う。(同上)
- * 学生さんがとても頑張ってくれていた。それを見ていろいろと勉強になり、自分を見直すきっかけとなったので良かった。(同上)

学生と一緒に取り組みが「学生の姿勢が現場教師を励ます」「教師が自身を見直す」ものとなるというのである。「異なる」者との出会いの意義と言えよう。また、一緒に考え、工夫することと記されていて、協働的体験として現場教師が楽しんでいることが伺われる。「自分を出す」ことに言及したコメントからは現場教師の描く保育者像の一端が伺われる。

③ 石川県私立幼稚園園長による評価

2015年7月に石川県私立幼稚園全園長対象にアンケートが実施された。「『幼どこ』を通じて学生に何を体験させたいか?」という設問に対して29名の回答があり、「それぞれの特性を持つ私立幼稚園がそれぞれ大事にしながらも横のつながりも大切に学び合っているところ。石川県全体で学びを深め、保育の質を上げていこうとする努力をしているところ。」「子どもたちの遊びを大切にしていることを見て感じとって欲しい(遊びが学びである)。」「後略」「前略・・・絵画制作のダイナミックさや年齢に合わせた遊びの空間、様々な遊びや保護者との関わり方や先生たちの動きなども見てほしい。」等、多くの視点からの記載があり、石川の私立幼稚園長の描く保育者像が語られている。まとめると次のような保育者像が浮かび上がった。

- * 学びにおける遊びの重要性(を理解する保育

- 者)遊びの内容と組み立て(ができる保育者)
- *各園の横の繋がり、協働の在りよう(を理解し、園を超えて協働できる保育者)
 - *私立幼稚園の多様性(を知り、互いを尊重できる保育者)
 - *保育者の現場での動き(から学ぶ保育者)子どもや保護者との関わり方(を探る保育者)
 - *保育者が興味関心を持って楽しんでいる姿勢(楽しめる保育者)
 - *子どもとの遊び、共に過ごすことの楽しさ、充実感(子どもといっしょに遊べる保育者、共に過ごすことを楽しむ保育者)
 - *イベントの企画準備から当日まで継続して創り上げる姿(長期的指導計画にそって創り上げることのできる主体的な保育者)

④ 参加学生からの評価(2011年~2014年)

「イベント感想反省」に参加学生が記したものを毎年の実行委員会が集計している。そこからの抜粋である。

- *2日間を通してもっともっと積極的に関わりながら周りの様子をよく見て、何をしなければいけないのかを判断して動いていきたいと思った。(身体表現 2011年)
- *先生方の準備の様子や子どもたちとかかわる姿を見ていると楽しそうでとても魅力的な仕事だと改めて感じた。(身体表現 2011年)
- *今回のような保護者の方との関わりをもつ体験ができ、就職をすると保護者の方との関わりも大切だと再認識した。(身体表現 2011年)
- *先生方のこどもに向ける笑顔の違いにも気付くことができたり、出てくるアイデアがすごく驚いた。(ドラマ 2012年)
- *演じ方や話し方など見本になる先生の姿が多く、近づけるようになりたいと思った。(同上)
- *小麦粉粘土を作るときに自分が声掛けをしても触りたがらない子どもがいて困っていた時に、他の先生の言葉がけを真似してみると上手くいききました。近くにたくさん先生がいて言葉がけやこどもとの関わりを間近で見れることができて本当に楽しかった。(製作 2012年)
- *二日間共に来て下さった方、楽しそうねと嬉し

そうに作っている姿、泣きながらも粘土をこねているそれぞれのこどもの姿を見れて、同じものを通してそれぞれ違う姿を見ることが出来て良かったです。(製作 2012年)

- *はじめは保護者と一緒にいる子どもに対してどのように関わればいいのか戸惑っていたが、カードやシールを持って積極的に関わることで保護者や子どもとコミュニケーションをとることができた。(身体表現 2011年)
- *初めは気楽に考えていたが、実際に準備や練習をしていく中で大変さがわかった。(ドラマ 2011年)
- *学生と先生方との距離が近くなり、とても楽しく過ごすことができ、先生とも一体感があり、一緒に参加して良かった。また学生の意見も取り入れてくれ、全員で一つのものを作り上げることができた。(アート 2011年)

学生は教師の姿を多く記している。二日間開催の意義にも気づいているようである。先に見た幼稚園長が学生に体験させたいことと照らし合わせると「幼稚園教師」「遊び」「保護者とかかわり」「継続して創り上げる」に対しては学生の目は向けられている。「園を超えた協働」や「私立幼稚園の多様性」についてはどうであろうか。

当日の感想にはなく、時間を経て記憶に残っていることがあるのではないかと考えて、4年生で「幼どこ」ボランティアに参加した保育者4名に1年前を振り返って「幼どこ」に参加して何を得たかを質問した⁶。全員が「意見を言い合うことができて一つの遊びを創り上げていくことのおもしろさ」を、2名が「学生とは違う幼稚園の先生の見方、視点が見えた」ことを挙げた。一人が「グループは一人ずつ別の園からの先生で構成されているので、遊びについての視点が園によって異なることがわかった」と教師による違い⁷に留まらず園の違いを見ている。

「協働」については、全員が「意見を言い合うことができて一つの遊びを創り上げていくこと」を挙げ、意見を言い合える対等な関係性と、一つの遊びという共通の目標に向かっていくことの楽しさを体験したと考えている。また、半数が学生とは異なる幼稚園教師を感じていて、異なる主体

が目標を共有し対等な関係で力を合わせて活動するという協働の要素に言及している。学生は、園長たちが期待していた幼稚園教師たちの園を超えた協働を見ることや、学生参加要請の開始時に実行委員会が想定していた教師たちの協働に教師の一員として参加するといった協働体験ではなく、立場が異なる者として参加する協働の当事者性を楽しんでいただけたことがわかる。また、学生間の関係についてリーダー体験者が次のように述べていて、「異なる」ものによる協働との対比を体験している。「誰かが上に立って命令するのではなく、みんなで遊びを作りたいという思いだったのですが、実際はリーダーの指示待ち。リーダーが言ったから何に使うかよく分からないけど作ってる。といった雰囲気になる事が多く、みんなで遊びを作る楽しさはあるが、みんなだからこそ気持ちを揃えるのが難しいという事を学びました」。

2011年から2014年の「幼どこ」学生参加に対する各層からの評価を見てきた。学生参加の効果と可能性を次のようにまとめることができるだろう。

- * 学生の幼稚園理解、魅力の伝達、遊びの面白さを体感する場として有益
→幼稚園就職希望者の増加が期待される。
- * 学生が幅のある様々な各園の保育者の姿を知る場として有効
→私立幼稚園の多様性に対する理解が期待される。
- * 学生が園の垣根を超える幼稚園の協働など、「異なる」ものだからこそその協働を体験する場として有効
→保育者としての高次の職業意識、倫理観への目覚めが期待される。
- * 賑わいと明るさを得てイベントが活性化する。
→幼稚園スタッフのやる気の高揚が期待される。
- * 養成校の垣根を超えて養成校学生が連帯感を感じる。
→就職後の同僚性の構築が期待される。

3. 養成校としての評価

－ 養成校にとっての「幼どこ」－

3-1 養成校の保育者養成プログラムと「幼どこ」

「幼どこ」に初めて学生ボランティアが参加した2011年は、県内養成校がそれまでの2年制での養成から4年制での養成を開始、あるいは移行し、最初の卒業生が出た年である。2年制から4年制への移行であった北陸学院大学の場合、幼稚園教諭養成プログラムをどのように再構成し「幼どこ」をどのように位置づけているかをまとめた。

4年制への移行で養成校は一種免許状にふさわしい幼稚園教師の養成とは何かを問われる。その回答として幼稚園教育実習の在り方を見直し、実習をめぐる4年間の養成プログラムとして整備してきた⁸。大学で「習った」パフォーマンスを園児の前で演じて見せることが部分実習と言えるのか、養成校の授業でつくった工作を自身がしたのと同じ手順で園児につくらせる部分実習でよいのか、実習生の接遇について実習園から指摘があったからとマナー講座を開くことが現場のニーズに応えることになるのか、といった素朴な疑問から実習内容を見直し、一種免許状を得て卒業する者には、実践を通じて学び続けるという志向性の獲得と子どもが遊びを通じて学ぶことに対する深い理解の二点が求められると仮説した。実習を含め「幼児の遊びを創る体験を積み重ねる4年間のプログラム」の2015年現在の到達が図1である。

入学直後に体験するEnjoy! ミッションは、幼稚園から大学まで全校種を有する北陸学院が校種を超えて交流するイベントで主会場は大学キャンパスである。幼稚園教諭、小学校教諭、保育士の養成課程をもつ幼児児童教育学科では授業の一環として自分たちの生活の場であるキャンパスに「遊びの広場」をつくる。入学間もない1年生は4年生と一緒に、家族と参加する2つの幼稚園の園児を主な対象として遊びを創る体験をする。4年生が遊びのプランを考え、そこに1年生が加わって準備と当日の実践となる⁹。8月には幼稚園の夏休み預かり保育に1年生と2年生がボランティアとして参加する¹⁰。いずれも「異学年」に

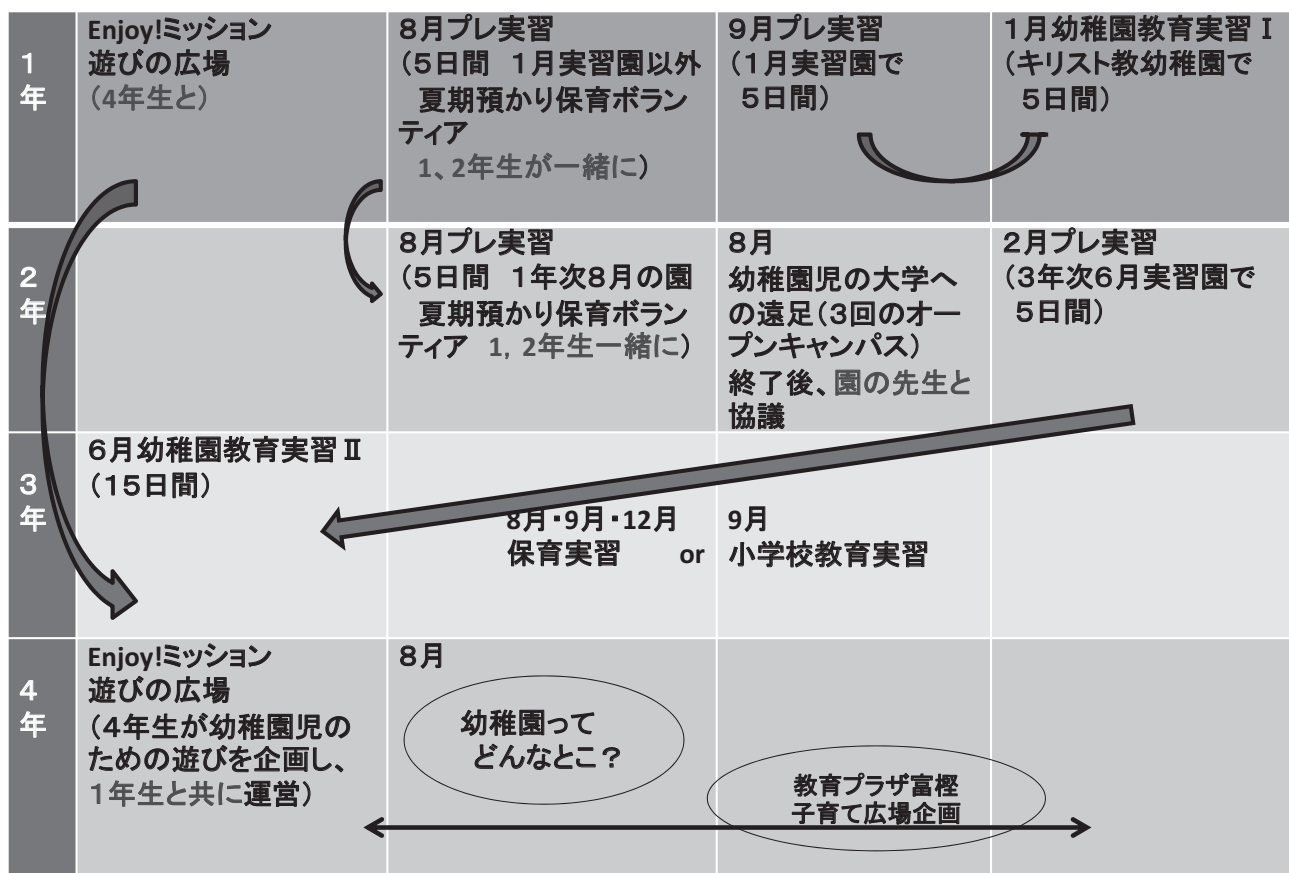


図1 幼児の遊びを創る体験4年間プログラム(2015年度)

ポイントがあり、お互いの存在から起こる学びの仕掛としての設定である。このように、遊びを創る様々な現場的体験を螺旋階段を上がるように繰り返すプログラムで、実習もその一環に位置づく。順調に進んだ場合3年生ですべての実習が終わるカリキュラムであるため、4年生ではそれまでに培ったものを総合して発揮する場が望まれるところで、金沢市より委託されている子育て広場での体験などを含めてプログラムは整備の途上にある。「幼どこ」は、それまでに培ったものを総合して発揮する場の一つとなる。


3-2 幼稚園教育実習における課題

北陸学院大学の場合、3年次6月の15日間の幼稚園教育実習Ⅱは「幼児の遊びを創る体験」プログラムの中間まとめとなる。幼稚園教育実習Ⅱで実習内容として重視しているのが実習協議である。協議する力、即ち「共に考える」力は学び続ける保育者であるための必須要件で、一見協調性に見える「周りに合わせてしまう」姿では保育者は自らの資質を向上させていくことはできないと

考えられる。実習における協議につながるよう仕掛られていることの 하나가、実習開始前に実習園に即した15日間の連続した指導計画を立案することで、その指導計画を実習園と事前協議することとしている。指導計画立案は立案自体が練習課題であるが、加えて、実習園の教師に向けて学生が自ら対話の材料を持って臨むように導く仕掛でもある。指導計画には図や写真の活用が奨励されるが、現在の学生世代が得意とするツールを生かした伝わりやすい提示にすることによって、実習園の教師との協議が生まれやすくなると考えている。毎日の実習記録には幼稚園からの記入欄は設けておらず、実習生が教師と話して得たことを自分の言葉で書く欄としている。これも実習協議に学生を向かわせる仕掛である。

協議は対等な関係性が前提である。立場は異なるが対等という関係を全ての実習園が歓迎はしないだろう。「指導する—指導を受ける」という従来の非対称な関係性からの転換が望まれるが容易ではないと思われる。

4. 異なる立場の者が共に遊びを創る体験のもつ意味

2章で見た学生スタッフの感想に「学生と先生方との距離が近くなり・・・(中略)・・・先生とも一体感があり・・・(中略)・・・また学生の意見も取り入れてくれ、全員で一つのものを作り上げる・・・」とあり、対等な協議を楽しむ様子が伺われる。「幼どこ」学生ボランティア体験者が1年前を振り返って「楽しかった点では、実習とは違い、現場の先生、学生、みんなで一つの遊びを作るというものだったので、打ち合わせの時から話し合っイメージを共有出来たこと、1日目を終えてみんなで反省を考えられた事など、一人ではなくみんなで、しかも現場の先生も一緒に一つの遊びについて考えられて先生たちのねらいなどを間近で聞いて感じられた事がいい経験になった」(下線筆者)と述べていて、1年後にも「実習と違って」と思い出されている点が注目される。実習との違いはどこにあるのかを考えてみたい。

「幼どこ」の学生参加には、ブースの遊びの宣伝パフォーマンスやグループ別準備のように、任されて自分たちですることがあり、その一方で幼稚園スタッフや他校学生など普段とは異なる人たちと共にすることが用意されている。「任されて」があること、さらに任される内容が自己表現の課題であることで、指示される存在ではない在り様を学生は「幼どこ」で用意されていることになる。そのような在り様の上に「異なる者と一緒に」を体験することになるのである。

「幼どこ」における「一緒に」は、単に同じ空間にいること、あるいは分担してそれぞれの責任を果たすことに留まらない。なぜなら「幼どこ」は保護者、それも入園を控えている保護者という私立幼稚園にとっては最も気をつかう相手を対象としているからである。遊びについて、幼稚園について、幼稚園の先生について、保護者に何を伝えられるか、何が伝わるかに「幼どこ」の全スタッフが関係するという緊迫した状況設定である。勤務園は異なっても現場の教師同士であれば暗黙の了解で進行することが学生には了解されないなど、学生が加わることでスタッフ間で協議することは増えるだろう。2日間の開催である

こともまたスタッフ間の協議の必要性を高める。

1日目終了時の振り返りでは、1日目の実践によってスタッフそれぞれの考えが行動としてお互いに見え、言いたいこと、聞きたいこと、言わないといけないこと、聞かないといけないことが具体的にある状況となる。1日目を終えて、2日目はもっとよいものにしたいという目標が共有されてもいる。ここまでは、実習においても同様なのかもしれないが、実習あるいは職場における関係とは異なり、「幼どこ」の1日目終了時は、翌日でスタッフとしてのお互いの関係は解消する。これからのことを心配して言いたい気持ちを抑える必要が少ない。即ち、「幼どこ」では協議が必要な状況が生まれるのに加えて、メンバーが対等に協議できやすい条件が揃っているのである。

幼稚園スタッフにとってはどうであろうか。2章で見た幼稚園スタッフの感想に「初回の会合からスタッフ園の先生方と学生の皆さんで意見を出し合い」とあり、協議を歓迎する様子が伺われる。実際に、1日目の振り返りで学生の意見と現場スタッフの意見の違いから議論になったことがあったという。製作コーナーで、学生スタッフから「せっかく二日間来てくれるのだから同じことではなくもっとおもちゃを増やしたり、少し新しいものをするなど変化をつけるのがいいのではないか？」という意見が出されたのに対して、幼稚園スタッフから「二日間とも来る理由として、昨日のあれをしようという思いがある。特に2歳児は同じことを何度も繰り返して楽しむ年齢である」という意見が出されている。学生スタッフから「もっとおもちゃを置いたり、かわいいものを貼りつけて壁を飾ったり、ゲームっぽくすると楽しいのではないか？」という意見が出されたのに対して、幼稚園スタッフから「粘土の感触をじっくりと味わって楽しんでもらうことがねらいだから、他の要素を入れると楽しめなくなるんじゃないかな」という意見が出されている。「ゲームっぽくするなら、ねらいから立て直すことになるね。環境の構成を含めてもう一度構成し直す必要があるよね」というグループ協議となり、ねらいをもって遊びを構成するという幼稚園教育の原理に言及する協議となっている。

このような率直な意見表出と意見交換で進む議

論は、幼稚園での実習協議ではなかなか起こりにくいであろう。実習では、協議で話題となる子どもについての情報も園の保育についての情報も教師と実習生で大きく違うため対等な協議になりにくい。さらに指導する者と指導を受ける者という役割意識がお互いの発言内容を縛るであろう。教師が「指導的」であると学生は担当教師に合わせるのに精いっぱい自らの意見を自覚することも難しいのかもしれない。

では、幼稚園の教師は勤務園において教師間で対等な協議をしているだろうか？保育者の質の向上を担保するものとして注目されているのが同僚性で、対等な関係性で協議できることは幼稚園教師に求められる今日的課題の一つである¹¹。全日本私立幼稚園幼児教育研究機構が公開保育を活用した第三者評価システムに取り組んでいるが、それは保育所等で実施されている外部監査的な書類チェック方式ではなく、公開保育を活用して外部の視点を導入することで自園の保育の改善に資するシステムを創るというものである。その際の評価のポイントは二点で、一つは「幼稚園教育要領の内容に準拠しているか？」で、もう一つが「組織風土の醸成・学び合い育ち合う『しくみ』への取り組みがなされているか？」である。同僚性はその園の教育の質を高めていく主要な評価ポイントであることを強調しているのである。

特定の人の意志が暗黙の了解で集団のものとなる関係性は協調的で穏やかに見える。日本の風土とも言え、慣れた身には過ごしやすく動きやすい環境であろう。しかし、同時に自分で考えなくてもよい環境となりやすく、個々の保育者の向上の契機を放棄することとなるだろう。さらに、暗黙の了解で進む「合わせてしまう」保育者の人間関係が幼児の人間関係観に及ぼす影響も考えなくてはならない。保育者が意図せずに子どもに伝えていることにも保育者としての責任がある。周りの思いにアンテナを張り、はずれないように、はみ出さないようにと自己調整する生活では、幼児教育が学びの源泉として考える我を忘れて没頭するような遊びは体験できないだろう。「幼どこ」は、立場の異なる者が対等な関係でいっしょに遊びを創り、協議する場を幼稚園教師にも提供していることに注目したい。

5. おわりに ー地域の特性を生かした保育者養成と養成校の役割ー

養成課程と現場での育ちを含む保育者の育成は、保育の現場が培ってきた遊びの世界、フレールベルがKindergartenと命名した子どもの育ちの庭を原点とする幼稚園の理念を次代につなぐ喫緊の課題である。幼稚園の帰趨自体が不透明な今日的状況であるが、遊びを創ることのできる保育者の育成は保育の質を担保するものである。歴史的に「現場で育つ」伝統が色濃い日本の保育者の育成であるが、養成校在学中の「実習園に任せる」実習と就職後の園の教師をモデルとする育成という従来型の「現場で」では、「幼どこ」の評価に垣間見られた幼稚園現場の描く今日的な保育者像に対応できるとは思われない。

養成課程と現場研修の連続性について金子(2013)¹²は、「養成段階では子どもを保育するための専門的知識や技能を獲得すること（基礎的力量的形成）が、現職段階では保育者としての専門性を研修にて維持・向上・発展していくこと（研修による力量形成）が重要である。」と述べ、「養成と研修の各段階でそれらの力量をいかに有効に形成し、そしていっそう発展させていかに養成校教員の役割がある」と言う。この点について、本研究が「幼どこ」で見えてきたことを対比させて考えてみたい。「幼どこ」が生み出した現場保育者と養成校学生という立場の異なる者が目的を共有して遊びを創る体験は、協働とは呼べないとしても協働の芽生えとでも呼びたいものである。多くのスタッフが「よりよいものにしたい」という思いを一つにしていることが学生と幼稚園スタッフ双方を鼓舞し、双方が互いに信頼を寄せる関係性を育んでいた。おそらく、その関係性がさらに学生を活性化させ、その姿を見た園長たちの学生に寄せる信頼に結びついたのであろう。

共通の目的については、1年前を振り返った「幼どこ」学生ボランティア体験者が「幼稚園保育園こども園ってこんな楽しいところなんだよって子どもたちに伝えられる力、すごく大事です。」と述べていて、学生も「幼どこ」の意図を的確に把握していることが伺われる。「楽しませる」ではなく「伝える」というレベルで目的を共有しているのである。金子は就職後の保育現場において

「専門性を発展させる力量」として「協働的關係→連携→視野の拡大と深化」というステップアップを想定しているが、「幼どこ」は、遊び創りでは学生と現場保育者は対等な関係で協働することが可能であり、対等な関係性での協議もまた可能なことを示している。

最後に、本稿が表題に用いた「接続」について述べたい。従来、養成校と保育現場の関係は「協力」として展開されてきている。その関係を「連携」と表記していることが少なくないように思う。幼児教育から小学校教育へのスムーズな移行をめぐって、「連携」による支援から「接続」による支援へと見直しがされてきた。養成課程から保育現場への移行においても、学校での養成と現場での育成として分離するのではなく「接続」としてとらえるべきではないだろうか。「幼どこ」への学生ボランティア参加は、現場保育者であるか養成校学生であるかという立場を超えて協働の場が設けられるならば、保育者にとっても学生にとっても協働が学びの場となること、協働が相互信頼を生むことを示唆している。養成課程と現場での研修を分離するのではなく、養成校の学生と現場保育者とが対等に参加できる仕掛¹³を様々に設けることが双方に気づきと学びをもたらすだろう。養成校の役割も、養成課程と現場研修というように二分してとらえるのではなく、学生と現場保育者が目的と活動を共有する協働の場が広がるようファシリテーターとしての機能が求められよう。

幼稚園団体や保育所団体が実施するイベントは多くの地域で実施されている。しかし、「園を超えて」をコンセプトとするものはどれほどあるだろうか。石川県の私立幼稚園は「幼どこ」だけでなく園を超えての取組みを長年にわたって重ねてきている¹⁴。幼稚園教師たちが園を超えて「一緒に」することに慣れてきているという特性を生かし、この地域だからこそできる保育者育成を協働して探ることが地方の保育現場と養成校の責務だと考えるものである。

付記：本研究は2015年8月18日・19日に開催された全日本私立幼稚園幼児教育研究機構 第6回幼児教育実践学会で筆者らが口頭発表した「保育者

養成（養成校との協働）」をもとに大幅に加筆・再構成したものである。2章を鮎川が3章を大井が分担執筆し、1・4・5章は共同執筆した。

¹ 大井佳子・熊田凡子・向出圭吾（2015）4年制での保育者養成における幼稚園教育実習指導試案（2）－実習生の指導計画を通して見えた幼稚園と大学の実習像－ 北陸学院大学 北陸学院大学短期大学部研究紀要 7.11-25

² 第一回は金沢市街中心部のデパートの一角と近郊の町立ホールの2か所の開催で、翌年より石川県産業展示館に会場変更し「幼稚園の遊びを満喫する一日幼稚園」というコンセプトでの実施となった。会場をパネルで仕切り、保育室1・保育室2・遊戯室・ウサギや虫のコーナー・焼き芋・お店屋さんごっこ・絵本コーナーというふうに幼稚園の空間に近い設定で、来場者に幼稚園での園児の活動と先生の姿が見えるように設定されていた。

³ 市民に演劇・音楽・美術活動等の練習の場を提供するというコンセプトの施設。希望日の全館使用予約のために園長数人が予約開始日の前日から交替で並ぶ。

⁴ 初年度にはイベント実行委員長が県内養成校6校を訪問し、幼稚園教育実習担当教員と面談して趣旨を説明し卒業年度学生で特に幼稚園志望学生への参加呼びかけを依頼した。

表1. 「幼どこ」参加ボランティア学生数の推移

2011年度	2012年度	2013年度	2014年度	2015年度
45人	40人	61人	61人	75人

2012年度から2013年度への参加者増は、当初実行委員会が設定した各校の人数を超えて参加希望があり養成校からの要望で人数制限をなくしたことによる。

⁵ グループの遊びによって学生の参加内容が異なるため、実行委員会がその年の各校の参加人数によって養成校のグループ配属を決める。

⁶ 男性2名女性2名の北陸学院大学卒業生。勤務先は幼稚園2名保育所1名認定こども園1名。質問は対面による者1名メールによる者3名であった。

⁷ 教師について、イベントに提出する感想には書かれないうことも学生は見ている。「一緒に遊び始める先生ってやっぱりいい！ぼーっと突っ立ってただ仕事しに来たやる気ゼロの先生って、学生から見てもすぐわかる」と言う。ただし、その場合も「きっと子どもにも伝わってる。そういった、立ち振る舞いも大事なのだ

ということ」を学んだと言っており、実習での現場教師とは違う「幼どこ」だからこそ見える教師を学生は見ているようである。

⁸ 大井佳子・吉田若葉（2013）4年制での保育者養成における幼稚園教育実習指導試案（1）－幼稚園現場との協働の模索－ 北陸学院大学・北陸学院短期大学部研究紀要5.1-14

⁹ 2015年度は5月9日（土）実施。11グループで学生がグラウンドとグラウンドに続く丘に創った遊びは、アゲアゲ凧揚げ・空気を使ったおもしろ実験・新聞紙運動会・シャボン玉で遊ぼう・虹のジュース屋さん・濡れない水遊び・あわあわクリーム・布で遊ぼう・紙飛行機・大玉ボーリング・竹ブランコと竹櫓であった。

¹⁰ 2015年8月には33幼稚園で実施。出身地の幼稚園で1園1人で行う場合もあるが最多で14名を配属した幼稚園の場合はⅠ期（3日～7日）1年生2名と2年生2名、Ⅱ期（17日～21日）1年生3名と2年生2名、Ⅲ期（24日～28日）1年生3名と2年生以上2名。

¹¹ 全日本私立幼稚園幼児教育研究機構『公開保育コーディネーター（評価者）ハンドブック』

¹² 金子智栄子（2013）保育者の力量形成に関する実践的研究－有効な保育者養成と現職研修のあり方を求めて－ 風間書房 P170

¹³ 筆者らがかかわるものでは、鮎川：男性保育者の会 大井：北陸学院大学の地域貢献事業 あそび場JOJOが、保育者・教師・学生・保護者が「共に遊びを創る」場を持っている。

¹⁴ 石川県私立幼稚園協会が園を超える協働として積み上げてきたものの例を挙げる。

◇アスレバル（幼児体育祭）：地元テレビ局との共催で昭和40年代から開催されている金沢市と近郊私立幼稚園の合同運動会。回り持ちで各園から出る教師でその年の内容を定める。

◇冊子の発行：

『あのね 幼稚園でね －親するあなたへー こんな子に会ったよ』2001年5月発行 出版プロジェクトチームが県内私立幼稚園全教師に向けて次の呼びかけで原稿募集した。「この冊子は頂いた原稿を並べて作る文集ではありません。いろいろな事例を持ち寄って、そこから見えてくるものを探る、これは石川私幼の共同研究であり、みんなの共同製作というわけです。」『だから 幼稚園』石川県の私立幼稚園を紹介するガイドブックで2011年より隔年発行。各園の紹介だけで

なく、「幼稚園だからできること」「幼稚園だからこそ」を伝える企画を私立幼稚園協会の編集チームが作成する。2015年には各園から持ち寄られた映像で幼稚園生活を伝えるテレビCMも作成している。

◇研修・研究：

『グループ研究』2001年より 毎年3つ～5つのテーマで参加呼びかけがなされ、参加者は年間5回の研究会に継続して参加する。

『研究プロジェクト』私立幼稚園教育研究大会の分科会発表は一園が引き受けるのが一般的だが、2006年より石川県はグループ研究を基にプロジェクトチームとして発表を行っている。

◇学生懇談会：養成校の最上級生と私立幼稚園の園長、主任、現場教師との懇談会。グループディスカッションで、どのグループにもいくつかの園の立場の異なる先生が入り、異なる養成校の学生が入るようにグループを編成する。

